

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(一九)

文出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮
——阿波岩倉和泉岸和田近江水口駿河駿府伯耆米子への変転(十四)——

謹賀新年

平成二九(二〇一七年)、明けましておめでとーございます。

本誌連載が一九二回、12×16＝192で、十六年を経過して十七年目の第一歩となる。二〇一七年の一月号が十七年目の出発。「反骨の提言、共生・共栄・共同・共栄：、大河ドラマへ」への祈願が共感されて共楽の喜びを共々に祝杯にする歩みが進む。歳月の過ぎることのはいいことの驚嘆とその時日に一歩一歩と継続してきた成果を、継続は力なりと共賛する。



静岡駅前の家康像の路面案内板



静岡駅前の葵タワーを背にして立つ徳川家康像



田中城下屋敷跡に復元された本丸二重櫓



下屋敷跡での菊花展風景



田中城本丸跡案内

午前中に猛攻して陥落させ、城主松田康長を戦死させたが、一柳直末が鉄砲に撃た

小田原攻め、「天下」が全国の意に

最初の戦国天下人の三好長慶が支配した京畿が「天下」、天皇の存在によって重層的な支配構造が形成された京都とその近辺を畿内として京畿の首都圏を「天下」とした。その長慶の「天下」を武力によって奪うことが織田信長の「天下布武」の印章、旗幟の天下の意味であった。長慶から信長、秀吉への三〇年ほどの間に、「天下」が日本全国の意味となる。天皇の権威を利己的に

利用しながら自己を頂点とする身分制を形成することになる秀吉の時代にそれが現実化する。それが中世から近世への移行の意味ともなる。四国・九州平定で自信を持った秀吉は「惣無事令」を出し、大名の私闘を禁止し、違反するものは「征伐」することを宣言した。秀吉は諸大名から絶対服従を誓紙で確約させて所領安堵を保障するが、従わぬ者には圧倒的な兵力で征伐する「大義名分」の根拠に「天下惣無事令(豊臣平和令)」を置いた。真田氏を侵略した北

條氏が「惣無事令」の違反者として、総勢二二万の圧倒的な軍勢で「小田原征伐」をする。それで北條氏を滅ぼし、その過程で伊達政宗・南部信直・最上義光らを服従させて関東・奥州が結果的に平定された。それで天正十八(一五九〇)年の「小田原征伐」が天下(全国)統一の画期とされた。天下の意味が変転したのである。

小田原攻め始末

小田原攻めは二月一〇日の家康の駿府からの出陣で始まり、二月二〇日の豊臣秀次の京・前田利家の金沢からの出陣、二七日の二〇〇隻を超える豊臣水軍の清水港入港などの準備がされる。三月一日に秀吉が京の聚楽第を出発し、三月二七日に沼津に到着、翌日に長久保城で軍議を開き、二九日の早朝から秀次軍が箱根の要所の山中城を攻める。その先鋒に中村一氏勢がなつて

れて戦死し、秀吉が悲嘆にくれた。四月一日に秀吉本陣が箱根の早雲寺とされ、各隊が小田原に侵攻する。しかし、速攻はせず小田原城を包囲しての持久戦となる。六月五日に伊達政宗が到着して九日に秀吉に白装束で会う。二六日に小田原城の西の笠懸山に石垣造りと天守の石垣山城を「夜城」として披露。秀吉が大坂より職人を呼び寄せて四月に工事を開始して八〇日間で完成させ、目隠しとされていた樹木を伐採して「夜城」と称した。

七月五日に北条氏直が籠城兵の助命を条件に投降して小田原城が開城。七月三日に秀吉が小田原城入場。七月十一日に開戦の責任で北條氏政氏照・重臣の大道寺政繁・松田憲秀に切腹、北條氏直は高野山追放処分とする。十六日に小田原開城後も水攻めされながら抵抗していた忍城が開城して、小田原攻めが終了する。秀吉は七月十七日に小田原城を出発し、七月二六日に宇都宮に到着。関東・奥州仕置を実施、各大名が宇都宮に参陣する。九月一日に京都に帰着。

中村一氏、駿河国主に

小田原攻めが結着して関東奥州の仕置きがされた。三河を本拠とする徳川氏が今川氏の滅亡の後に遠江を、武田氏の滅亡の後に駿河・甲斐・信濃三国を支配して五万國支配を領国とする大々名になっていた。その徳川氏が五万國支配から「小田原征伐」の後に北條氏の領国であった関東八国に転封され、天正二八(二五九〇)年八月一日を期して移動し、

太田道灌の由縁の江戸城に入城した。その日が「八朔」として祝福の日とされ、みかんの八朔の名とされている。その日が小生の誕生日で、高校の日本史学習で「八朔」のことを知って以来に、めぐり合せに何かとの思いを馳せて今日に至っている。

徳川氏の関東への転封で三河・遠江・駿河・甲斐・信濃が空白の地となった。家康の与力であった信濃の国衆の木曾義昌、

小笠原秀政・保科正直・諏訪頼忠も関東転封された。

三河・遠江・駿河に豊臣秀次を支える宿老とされた中村一氏・田中吉政・山内一豊・堀尾吉晴が配置された。中村一氏が駿河一國の国主に封ぜられ、田中吉政は三河岡崎、山内一豊は遠州掛川、堀尾吉晴は遠州浜松に封ぜられた。本来は織田信雄が三遠駿三国に封ぜられる仕置がされたが信雄が織田氏の故郷の尾張を要求して拒否したために下野に流罪とされ、尾張には豊臣秀次が近江長浜から移封され、その宿老の中村・田中・山内・堀尾氏が近江の封地から駿河・遠江に移動した。中村一氏は遠江水口六万石から駿河二四万五千石の国主として徳川家康の駿府城に入城する。豊臣秀吉の「天下(全国)」支配の手駒とされて、徳川家康の城に入り、関東に転封の徳川氏と領国

を接しての目付けとなる。このことが中村一氏の家老の横田内膳正村詮の人生に大転機を与える。小田原攻めの時には藪内匠・渡辺勘兵衛らの重臣が一氏に従っていたことは知られるが横田内膳正村詮の出陣は知られないので近江水口で留守居の統治に当たっていたものと推測される。

横田内膳正村詮 田中城主に

中村一氏が駿河国主として駿河の府中の意から駿府と称される駿府城に入城し、駿河統治のために弟の中村氏次(栄)を沼津の三枚橋城(二万二千石・河毛秀次を興国寺城(八千石)に配置し、西部の要地の田中城・藤枝市八千石)、小芝江尻、城六千石に横田内膳正村詮の三男の横田隼人が配置された。中村一氏が生駒親正・堀尾吉晴と共に豊臣政

権の五大老・五奉行の体制を円滑に動かすための役割の三中老となつて上洛しての京都聚楽第での勤務が多かったために、駿河二國の統治は横田内膳正村詮に委任され、村詮が行政的な敏腕を発揮する。文禄・慶長の朝鮮出兵を含む天正十八(二五九〇)年から関ヶ原合戦後慶長五(一六〇〇)年までの中村氏の伯耆米子への転封の十年間の駿河統治をする。東海道の宿駅制の整備や領国検地などに実績を残し、「横田村詮法度」が駿河国中に四通が現存するように偉大な功績を残した。そのことが各市町史誌に記録されている。

田中城の跡

十一月十六・十七・十八・十九日に中村郁夫さんの主催で静岡に取材の探訪をして多大な資料収集をし、各地を探訪した。十八日に富士見



西益津小学校の城門風の校門



西益津小学校の校地の田中城本丸跡石碑



亀城・亀甲城の復元庭園



西益津小学校の校歌碑



西益津中学校の校歌碑

の日本平から富士山を仰ぎ、駿遠の海を眺望した後に、横田氏の田中城跡へ貸切の観光タクシーで訪れた。田中城跡の本丸跡には藤枝市立西益津小学校、二の丸跡には西益津

中学校が位置していることを知った。それが写真のように証明された。下屋敷跡に本丸二重櫓が復元されていて、菊花展が開催されていて中学生が修学旅行に來ていて若々しい声が響いていた。田中城は四重の堀に囲まれた直径六〇〇米の同心円形の珍しい城で、その形から亀城・亀甲城と呼ばれた。その由来を下校途中の女生徒に聞くと由来が確実に答えられて、教えた教師を称賛した。西益津小学校の校章は三葉葵に西の字を入れ、校歌碑に「亀城のほまれ高草の山より高き田中城／文武の道にすぐれたる／人をそだてし城の跡／この学園に光あれ光あれ。したしむ人におくれじと／命あふる若き子が／きそいてもえる園にこそ／文化の花は咲くべけれ／この学園に力あれ力あれ。学びのまどの朝夕に／ふるきをたずね新しき／誠の道を求めんと／まなぶもうれし手をとりと／この学園に栄あれ栄あれ」と刻まれている。西益津中学校の校歌碑には「高草山の名に負ひて／文武の誉れ高かりし／亀城の跡に位置しめて／いらかそびゆる学び舎は／わが西益津中榮あれ光あれ」と刻まれている。